

■被災地で学んだ防災意識

石綱あいみ 16歳

(さいたま市浦和区・高校生)

昨年12月に、ボランティア研修で、東日本大震災の被災地、気仙沼市を初めて訪れました。被災地の様子をバスから見たり、被災した方々からお話を伺ったりしました。震災関連資料を展示している施設も訪ねました。

東北のおいしい食材を味わう機会もあり、さまざまな体験を通して、たくさんのお話を学びました。

中でも、私の心に鮮明に残っているのは「リアス・アーク美術館」に展示されていた品々です。津波が去った後に被災現場に残されていたものです。

「この写真が私の家族のものだったら。このトランプペットが私のだったら」と自分と重ねて考えると涙が出そうでした。大切なものを失うことの恐ろしさを学びました。

館内には「偶然的被害」というものではなく、全て必然の被害」という言葉がありました。震災の被害を知って終わるのではなく、震災を教訓として防災の意識を高め、「必然の被害」に備えていく必要があると強く感じました。

先日、学校で「避難所運営ゲーム」を行いました。防災を身近なものとして捉え、真剣に向き合っていきたいと思います。

(2016年1月12日河北新報朝刊)

埼玉県の高校生、石綱さんの投書です。「被災地で学んだ防災意識」という文章から内容を読み取ってみましょう。

- ①石綱さんは宮城県の何市を訪れましたか？
()
- ②リアス・アーク美術館の展示物を見て、どのようなことを学びましたか？
()
- ③「偶然的被害というものはなく、全て必然の被害」という言葉から、石綱さんは何が必要だと感じましたか？
()

- ④あなたはこの文章を読んで、どのように思いましたか？
()

年 組 名前